

ロジャーズから学ぶ

日時：8月1日（金）16:30～17:30

場所：大ホール

畠 瀬 稔

1. ロジャーズとの出会い。①自己治療を求めて森田療法、座禅など。②友人の書棚のロジャーズの訳書に関心を持つ。③京大教育学部卒論「患者中心療法と教育」を書く。

2. プレイ・セラピーの実践と教育相談室の開始。①大学院で Axline の play therapy を実践。②教育相談室開設。京都新聞に記事、cf 増加。③心理教育相談室と改称。

3. 『来談者中心療法—その発展と現況—』（1964年、ロジャーズ選書7巻）刊行。3年間で3版の増刷。①黒丸先生のロジャーズ訳書批判に発憤したもの。相談室の院生と協力。②その成功でロジャーズ全集全18巻（後23巻）の編集委員に選ばれる。

4. 翻訳の交渉が縁で、ロジャーズのもとへ留学（1967年3月～1969年3月）①河合隼雄の帰国と刺激。②京都女子大学在外研究員第1号となる。③ロジャーズは引退したとの誤解が吹っ飛ぶ。④ロジャーズの第二の黄金期を経験する。

5. エンカウンター・グループとの出会い。① basic encounter group の体験。②カウンセリング・ワークショップとの違い。③ genuineness が中核条件であることを経験。④ Immercute Heart College 教育組織の EG による変革実践に目をみはる。

6. 帰国後、人間関係研究会をつくる（1970年）。①最初の全国的 EGWS10 日間（1970年開催）。以後各地に EG を拡大。（同研究会は現在年間40前後の EGWS を開催）

7. 日本人間性心理学会を作る（1982年）。①在米

時、アメリカ・ヒューマニスティック心理学会の盛況に刺激される。②日本臨床心理学会の紛争と解体時に帰国。③多田治夫、村山正治さんとの協力で、日人心創設運動。水島、星野、村上、早坂他多数の後援を得た。④学会組織・大会運営のヒューマナイゼーションに努力。

8. 日本に根ざした PCA の模索。①大グループ中心の欧米と大グループになじまない日本人のギャップ。②欧米人（自我の強さ、個の主張）、日本人（和と気配り、自己主張の弱さ）の調整。③明日香での苦い経験（日本人と外国人を平等割りにするグループ編成の提案が痛烈に批判された。④個の尊重と全体の調和の発展的統合を求める工夫。

9. ロジャーズ・ビデオ映像の制作から学ぶ。①ロジャーズの実践の映像を安価で身近な教材にする努力。②私の英語力不足を、有能なひとの助力で補ってもらう。③映像制作からロジャーズのすぐれたあり方に再認識を深める。

10. ロジャーズ『これが私の真実なんだ』（原題 Because That's My Way）から。①核心部分を受け止めている。②対決・反論しながら、前進をさせている。③発言できない人への配慮と、すばやいキャッチなど、ロジャーズのすぐれた応答に改めて学ぶ。

11. 終わりに。一人ひとりを尊重する組織の実現とその実践的研究が本学会設立の大目的であった。この達成は容易ではないが、この目的実現こそ世界共通の課題であり、人間性心理学の最重要課題だと思う。